琉球大学学術リポジトリ

経典補註

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション：琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内（みやらどぅんち） キーワード (En): In Collection: The Miyara-Dounchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: -, 2009/6/5 16:47 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6220

經典

補註

常四時周流循環不窮乃天道流行不易之常理　健ハスコヤカナリ陽ニ屬シ

陽有賢愚萬物之功剛之正直ナリ　仁禮陽トシ健トス

遂乗金德生々ナリ　循ハシタガフ　環ハメグル　周遍ナリ

乾陽天君　健　元　春　木　仁　肝　酸　父子

亨　夏　火　禮　心　苦　長幼

常四象　四德流行不易　利　秋　金　義　肺　辛　君臣

貞　冬　水　智　腎　鹹　夫婦

坤母地陰　順　陰有發生載萬物之功柔順ノ順ハシタガフ也陰ニ屬ス

利貞遂乗土德成就ナリ　義智陰トシ順トス

四時　五行　土人性　信五臟　脾五味　甘五倫　朋友

欽撰

天文地理ハ孝子伏犧ヒ河圖ヨリ出テ曆易水波ノ如ク常ニ變ニ若有ニ之ヲ其源一也所謂曆ハ乾性命ヲ理ル法ハ國人ヲ安ンジ政ヲ治ムルヲ玄黄也故ニ黄帝河圖ヲ受テ天文ヲ陳ス歳時ノ遷移ヲ考ル山原ヲ視テ文ヲ記シ日ヲ印シ月ヲ別テ晦朔圓缺ヲ測リ曆法ヲ制ス帝堯猶謙衡ヲ立ル七政ヲ齊ヘ曆ヲ治ル民ヲ教ヘ羲和ヲ命ジ四方ニ巡ル道ヲ集ル事ヲ儲テ紀ヲ表ス漢ノ歳ヲ始ル之ヲ聖人ハ曆玄理玄妙ニシテ其有ヲ

家して教事は暦算術を以て本理を解して及地理に日差
蓋し天文地理を法るの本なり故に美國は地形雷霆なるを以て
天地一理にして美咸宗平西海に渡り府陽に立て明
朝に儒学を奥へて天文地理を明窓白流今古匿にして
一家の中に藏衛の獨り理に通じ天を戴き天に
渾圓にして自然に陰陽五行を具へ其氣の性を
動ずるに沿て天円に充滿して重ずに止て地を凝る氣に
抱て中央に居て是形を生ずの活也 此理に由て形ある
物を地とし精氣を以て天を蔽ず火形なり陽精氣也

水に形なり陰に精氣也為物皆之を具ずに均しく之を具ずに於て
動ずるを以て天地陰陽相剋を生ずと雖も一なるを以て為云く
天に日月寒暑生ずの形有る故如何ん答曰実に形なるに有る
日に是燒光ずと火は精なるを故に是を月に是
虹形ずと水精なるを故に冷を成て流生ずに日に同
ずに月寒暑に何に由て常に運移するや曰陽は氣に
動ずを宗として止事を濟ず精ずに日に得て是を成
月は移して為物変化を示す地に野山有て高低を示す有
具河海有て其故を示す曰陰の象に精なるを以て

濕気にて躰を陽精を潤して時に凝結して水を生ず
言低濕の多く渟滯する所の濕毒に因る也人に対て
之い濕則ち躰を潤す血なり古説に肝也骨石髓肾
筋脈毛髮なり常に陰陽は二氣を稟受し共躰を
養ひ潤沢を流水に渓澤川河に譬て巡て滞
陽に入る也二使の道路なり人倫自己に行る因に
生る物此のごとく亦天地一体に理に在り共神に
何者ぞ曰天地則ち也陰陽共に体に成り陰陽を
育養し陰陽共に魂魄を自己の理なり

陰に陽に形ち行る動ごとく陽は動ごとく火を動く火に附
火に動に附西義二年に交を一四月に心火を感ず天極を
陰陽為化に機を包名して大極を云渾沌して共既判
に及二義に分て天地に象に分て形り五行に分て亦
為物に分て生殖繰施事消長の道人美測故に
乾坤男女に男女に亂交感為物を化生する対別
に分て谷神魂の等に百千万為に分て齊ごとに行ぐるなり
成化元年癸未晦月中和日

田中藤兵衛源四郎撰集

五倫名義

父子ニ有親ニ

父子ハ間ニ父慈ハ子孝ヲ以テ親シミ

天下ニ所生ノ人ノ子ヲ云ハ分テ六倫ニ云ヒ其上ハ各其教ヲ問テ
子教ヲ云ヒ云ヒ其間父母子ヲ生ヒ云ヒ天地ノ義理ヲ生ヒ
道理ヲ出テ父子ノ倫ヲ定ムル也親ノ教ヲ三テ父ハ慈ニ
子ハ孝ニ云ヒ父ハ子ヲ愛シ母ハ子ヲ育ル故ニ親ハ父母
ナリ子ハ父母ヲ敬シ親シミ慕ヒ敬シ親シミ慕ヒ
敬シ親シミ慕ヒ敬シ親シミ慕ヒ敬シ親シミ慕ヒ敬シ親シミ慕ヒ

教を勇ましめて父母に志を尽し身を慎むべきこと
孝にしたがひ但其間要を云ふ父子の間親一倫の云ふ
所を既に隔なく兄弟に自然の親しみを失ふ云ふ
所なり聖人父子の間に於て親の一字を以て
法を定め給ふ所謂父を親しむと云ふ一句に尽く父子の
按を記す○父子の間に天性より出け合ふ親しみ
深く厚しと雖も止ることの道なり義度機過
なくして止ることの道なり父母に道を陳ずる
道なり父母に諫を陳ずる時は心を
道なり父母に諫を陳ずる時は心を
和らげ色を和らげて諫を陳ずべし
若し父母ざる時は其の父に逆ふことなく敬を記し孝を記す
父母の不義に陥んとする時は父に逆ふ
捨て不義を諫め君に諫る臣に諫る
ひ出し諫て道を改め直すべし孝子は一度
是を聞け一度言を出すと父母に忘れ義理の
言行あらんと上を慎むべし行跡に非義の恥あるべき
なり父母を尊ぶことなれば深く慎むべし
ここに父母を尊ぶことなれば深く慎むべし
ここに孝子の上に居るものは驕ることなく慎む
ものなり人の下に居るものは謙ることなく慎む
人を陵しめ慢ることなく一度の上に居るものなり

ゆえなき人の所領を召し取り給ふ事なり
とは言いながら、孟軻の論ずるところ、孟子の論語の事、この三つは、
人倫の道を除くべきなり。親を愛する心、肉体を保つ
べきなり。亡利の三つは、父母の命を始めたまひ、日月
大宋は、懸隔して父母は肉体を授けたまふ。日月の
恩なり。○天地は性なり。即理也。天地あつて、理と云ふ人、東海
生まるる時、生まれ人より貴きものなり。人、万物は、中にて貴也
又人の行ひの中にて、善道より貴きものなり。父、二六の道を
行ひ給ふ故、天子と云ふ。天地に事ふる
道なり。外なる善道に外なるべき善道は、公程とさいはん
行くべき時は、日月星は、三光なり。全く変ずるに不可。天道清して
恨なきを也。三光全く、或は日蝕月蝕、流星又は、彗星は災なるべきなり。
有り。頻蝕は、彗星、客星は、凶の変なり。変異なり。
時の乱候事に、彗星、客星は、時なり。変異なり。
大風洪水は、災いなり。
君臣有義　君臣間は、君臣と使ひ、臣は、君に事ふるに忠を以て義とす。
君臣は、道理、天の上に位し、地の下に位する道理なり。都合
上下は、合なるべき、人道なり。故に、君臣は、倫理定まるなり。

其教を云て君に仁と人臣に忠と子に孝と人に信と云ふ五常人倫
皆ふ事なるべしと一通の義理なるを以て人倫を私なくして
皆く平に利益するを云なり又臣の道を云ふは自然物言まるを
云ふ故に臣下たる君に不仕して故なく妻子を養ふを云なり
但其間要を云ふ君臣に事義を云ふ言を尽し義に道理の
出入を云なり君を以曲尺とし臣を使尺とし其威儀に行て
以て敬を尽し臣も以礼を尽すべし君に事るべし臣に
対して以て敬を尽し聖人君臣間に於て義と云
不易の法と定めたる所謂君臣義なりと云一句に終る君臣
相交る道〻〻○臣の君に忠を尽すと云ふ四道を守て君に事り
諫めて君に不義に従ふを君に不義なりとて去て三諫を
以て去て逃て去て事ることを止るなり又忠を尽すと云ふ志を
尽して君を諫るを云ふ臣は君の命令を受て東西に走り
物を君に主張することを中かけ志のぞむ所なり上信
を尽て縣に隔ても乃至一家国天下に至ふ知るなり
人君は天地鬼神を祭て奉道して天極を尚ぶ
大なれば天道に順ひて山ゴボリに行ることを常に鬼
神を其位に崇て安んじ是天地位を得て徳を敬て

悉其德小之人共化之之て各其性に遂る事有り
なり故其所に能得法りて地道安寧なるなり

夫婦有別

夫婦は間に若定偶なりて乱れ

天は陰陽あるに人に夫婦あり陰陽和合して萬物を生育す
夫婦和合して子孫を生育す天人一理なるべし然るに陰陽
偶配なる陽は先ずなりて陰を偶し陰は後なりて陽に偶す
自然の理也之を和ぶなりて夫婦の偶を定むるなり故に夫は剛
正なる道を法とし妻は柔順なる道を法とし妻は偶し従ふ
べきなり夫は貴なり妻は賤なり夫は尊し妻は卑

耶家は乱れ易き事なり故に但其管要を以て夫婦和合
睦しく男女は其別あるを肝要とす 男は外を治め
女は内を治む男は男の道を正しくし女は女の事を正しくす
是外は其別乱れざるを以て也 然る故に聖人夫婦の間に於て
別の一字を最も法とす所謂夫婦に別あり云一句
夫婦の接する所 ○有別は配偶なり配偶は合也
正也偶也合也對也夫婦の交わりを定て乱れざるを別と云
有別は夫婦の間に親しき事なり故に常に乱れざるを
別と云又夫婦云は和して義有合有合別を別とする

長幼有序

長幼の間能く兄弟の次第ありて不差

父母の子として生れハ先に生るゝを長とし後に生るゝを幼とす
兄弟と云も同事なれバ能々兄弟ハ同じく父母の生躰をうけて
大切なるものなれバ是によりて長幼の倫を立て兄弟を重んず兄弟ハ
兄を敬ひ弟を道びきて父母存て後ハ父母に能兄ともなるべし
兄弟和りて常に形影の離れざることく親しみにして互に和睦
少き事より位に当るべしハ兄弟ハ天倫にして後て生するより
天の定まる次第なれバ後の長ハ以後兄弟謙遜互に
なりこゝろ肉睦の兄を考ゑて家督を継に至りて以後継
少き時より兄に先を事有は後に次第をなして一家の
禍となるべし故に聖人長幼の序を定めて序と云字を最
後を定めて序は次序して次第の事を備長幼に序ありと云
一句は兼て長幼の礼をなし○長幼は父母に事る道を推して
君臣に不施天地に事る道を推して長幼尊卑をたて一言の序に
順ふにハ云ことなりて人の道行に不乱ことを肝要なり

朋友有信

朋友の間能く信ありて不欺

天地の間に天地の氣を受て生まれバ朋友として交る道理
是によりて朋友の倫を立て仁を補け善を責て朋友の道とす

仁は己か行ひに私なき事なり仁を輔るとは己か情に寄心あれは
朋友の相輔によりて仁に至しむるを云義を責ることあるもの也仮従
まることく一家に善を法とある處まを云所し連なる人交はことのを
売まる人に交るとは益友とし柔弱にて俤る人交は訪に諛
なる人に交を損友とし趣まは益友を求め損友を遠ざけ戒之
読義所く鯨勧にて存交座し作其等要をは云ふを朋友の務とすに
物をひかをし事を損こにすのなれ背一貞信にて相敬ふるを
前言子くし絶交に至人朋友の間に於て信の一字を最要とし
法とは宣の事に所謂朋友に信ありと云ふ一白は郎朋友の掟る處し

○友の其友を忠告して云ふは朋友に仁を輔くることして若し不義
逆ある時は其人の職を宣して告け諫めて若くは逆ひくも忠は
まことあるもの也を揉ふ心の職を宣して乱を和け懇に
義理を言ひて諫め聴かるへく人なる時は其谷にて止む也まもなく
従ふ時は部て中忠くなり辱しめをうくるなり○衆人同ずるを衆に
人に従事を待ん事に附は用ありくなり無益の争聞を招くなり
無とは軍器抛るなりことに劇にかかり死するを云ふ○穢を園なる
友に交り和順の心を背一にて争ふことなる處しくざるなり
○噬象
元は色に德して天を統なり 乾は德元に長に居まるは則人の首なり世にこれを則
亨は倉比云ふなりて胸膝 貞は則元氣比衆る所なり

元　生物之始一味無差別人の性に於て仁也　是衆美の長なり

亨　生物之通一味無差別人の性に於て禮也　是衆美の会なり

利　生物之遂一味無差別人の性に於て義也　是衆美の和なり

貞　生物之成一味無差別人の性に於て智也　是衆美の幹なり

時　春　元東小屬　風四月三月　夏　亨南小屬　風五月六月　秋　利西小屬　風七月八月　冬　貞北小屬　風十月十一月

五事

一曰貌　貌也既生則聲音發　言也言既揚火也言既揚水也既生則聲音發

二曰言　言既揚火也言既揚水也既生則聲音發

三曰視　視木也既視而後聽　聽也既視而後聽

四曰聽　聽收金也思在耳心通于耳故

五曰思　思猶土也思在耳心通于耳故

貌曰恭　貌者容也恭者容也

言曰從　言者容之發順理成章者言即有從之德

視曰明　明者容之發明理成章者視即有明之德

聽曰聰　聰者容之發聰理成章者聽即有聰之德

思曰睿　睿者容之發睿理成章者思即有睿之德

木は仁と云いは則ち是れ理也　一つは木と云其形実

火は礼と云いは則ち敬れ理也　二は火と云其體形著

五行

金は義と云いは則ち宜れ理也　三は金と云其質最

土は信と云いは則ち実有れ理也　四は土と云其體固

水は智と云いは則ち別れ理也　五は水と云其體最微

仁は是れ理なり　水火は氣有て形ありと生ず

義は宜れ理なり　木は生有て形ありと和ず

礼は敬れ理なり　金は獣は和有て形ありと義ず

智は別れ理なり　人は氣なり生ずる故なり

信は実有れ理也　天下は美しきなり

五常

五常要義

人性倫

言は仁義礼智信なり人生東西は天理なり

故に倫と云たる人は倫の倫なり信は人は倫の倫なり

五行は人の倫なり

仁

温和慈愛則ち是れ理なり其義外側隠　義は宜しむ　外は宜しむと云

是れ宜しむ　心は宜しむと云

天は元亨利貞にして四季にわかれて四徳なり

天に具わる道理を云其道理人に具りて仁義礼智

なる其内仁は天は春にして元と名ずく陽氣

発生する道理なり発生は物をわかにして生し出すを云其

道理を人に受て仁となる故に温和慈愛にして意は氣の

温和なるを云て人を痛憐む心なり人にて仁あれ

其心情をく義と是知とるゝ事石ふしこゝ御とい仁い
心の潤ひて人とをくこゝ物と備ず常ふ道理ふ感してい必
恩愛まるゝ人ゝいるゝと仁云爾し　○温い和也柔也物やわらゝ
なるゝと温和と云うゝくしこゝをぐむと慈愛と云其い不遠
惻隱と心仁と端也惻隱と人非人也惻隱とい羞恥と
よむ惻い傷の功ゝり隱い痛の深也心ふい生ゝ物むゝり
天地性とい即理也天地にあつてい理と云人稟受て生ゝる
時い生ゝ者物ゝるふ以理とうけて生ゝるゝゝ人其氣ゝ仁ゝ
受て生ゝ人ゝ義ゝるゝ人い者物ゝ中の靈ゝ中して
淡ゝり又人の行ひの中ゝ中して者道ゝ人ゝ義ゝるゝ者ゝ
又人具ゝ是ゝ市の心ゝ全德合て以い仁義禮智ゝ是ゝ云
仁の一ふ名ゝ付ゝ仁ゝ愛ゝ云ゝ并愛い親ふ親しむ也
者道ゝ神一者物ゝ者ゝ道也又天地ゝ生成ゝ氣ゝ
形ゝ云ゝ理い心ゝ云也賦ゝ人ゝ行ゝ者ゝ云ゝ三才
中間生ゝ也天地ゝ功ゝ人ふ行ゝ者ゝ成就ゝ者也ふ參ゝ
ゝい天地ゝ云ゝ并て其化育ゝ助ふ天人ゝ二ゝ云ゝ者
陰ゝ圓ゝい象天ゝ象地也天ふ四時ゝ行九解ゝ二百
六十六百ゝ行天ふ風雨雷霆ゝ行人ゝ示ゝ所ゝ善惡ゝ行ゝ

陰陽雲雨を為し乾坤を為し風雷を為し日月を為して
天地と相参る也　仁は斡則隙に用るなり

義　断制裁割判宜き理なり其義為義也

其小を捨て利と名たく隆盛に粛敬なる道理
粛敬とは事物の義を為し実を結して義理を知る
事也其道理を人と立て義とする故に裁制断割して
殺なと裁とする仁は道理を宜くこなわるなり
是り此れ義なるごとく義は人のこれ有て一毛も立まりこれを
一言に云ふ事は生死を問は死なり

物変形して物の其節を違へざるを義と云なり
断は
裁也又変也制は御也裁は裁定也割は割也裁也
は字は裁衣を為ることを云変は事理に宜
なれば変して事を可きことを云なり義は心を制事を
宜也義悪を心義を端也是を人非也邪なる不義の
事の有を恥しと思は義也人の不義を見て是を小しも
悪なり義は体義は用なり

礼　恭敬礼節則敬は礼也其義為恭遜　恭は うやうしく　敬は うやまう　形ふるまひ　心ふるまひ

天地を礼は義なり天を尊と名たく陽に親は長養

道理なり長官とい為物を長しこそなれあざやかに心得る
事なりこれ道理を人と云て礼にかなる故に恭敬辞譲それ
敬人恭物を辞譲と云へり礼とは人の身に具備せる
衣冠正しく威儀礼にかなひ上を尊ぶ下を憐む人を先
己を後にし其外万に行ふ所事に応じ種々に面
おもて自由宮貴美術なる振舞なり又い詳略にして後
なる事なり○恭敬とは二つにしやまなる恭
敬也節に法度也恭敬とは敬ふ心を尊ぶ心礼を端也是なんい非人也
辞ハ辞退云ふ云た又い今報ふ功の有を人にゆずる時
義功に非ずとなるい辞退云ふ譲い推て人に無ふ也
有の功をたとえ共人の功なりと云て人に無ふ譲なり
礼い躬辞譲い用なり

智　合理是非判断理なり共義なり是非

天に立て人を治て貴ことなく陽に亂て関雎なる道理なり
関雎とい男女婚姻なり出けるを穴なりの也〜孔子為物を
関おさむる事なり其道理を人と立て智なる故に是非也

分別なるべし人不是非の大略（アラマシ）知こゝろ其心淺く落度
氣こゝろぶりふ偏て其見付る事ゆゑ宮る事ゆゑ其人氣
地下に深く落まりて意氣ばかりにて行ことく常に靜なる風
根ふかく物を答ふるゆゑ物ふかく問ふものゆゑ是非
進ぶるを智とふ愚し○分別いかて是非を分別て
是を是とし非を非とする是非を人智と隔也
是非なくん非人也善を知て善をなし惡を知て
惡をなす智は体是非の心用なり

信

中庸別実有之理ゆゑ其義為忠信

正ふかくして出昧ふかくして實なる質ゆゑ出昧是信ふふ
出開し事ゆゑ出れば出事ゆゑに出開あるごとく仁義禮智
為出信ふ離出ざる但仁義禮智外ふ信は道理なるゆゑ
あるゆゑ其仁義禮智故ゆゑ其實ゆゑ道理なる事を志すして
信を知ざる猶水は冷（ヒヤ）ふ火の暖（アツキ）ふ似ゆゑ君ふ
事父母に事るゆゑ其外男ふ行ふ人ふ交るふ到るまで
其心其實ゆゑ用ふ私を不挺外ふ師を事ふ傳ふ
道理の一筋を守て怠慢なざるを信とふ也○實其
心を出て行ふ實は吾一身は世の道を尽しそ其極敬を

年齢高くして、世務弥増に通達し、頻りに其
其徳は海内に光輝し、万事に明通すと云ふ事なり。○人間に
生まれて、父子親密なる道なり。外に出て、君臣忠義なる道也
是二つ備はる時、父子君臣の道、別て行はるる大道なり。理なり
忠信は君に事へる義なり。孝は父母に仕へる極めなり。云ふ
所は一つ也。君若臣に非ざれば、父母に極めなし。云ふ
所は、君若臣に非ざれば、父母に極めなしと云ふ。君臣行ひ
難き道に関はる事あり。故に臣道を御し、是を全
全て、後漢に云へる事なり。君若しの臣に行ひ
難き道を以て、泳助にまして、臣義せしむるなり。其若
大なる事に及ぶべきと思ふなり。君臣一致の道、必ず
臣に正しくして、是を止むるなり。其外に形ありて人
思ふべきなり。○君臣なる時は、臣に諫めしむる事
なり。○天人の道昭也。父母に孝を尽して、天地明徳なる
天道自ら明なり。万事感通なるを、みちなりと云ふ
倡和感通、故に彼此を云ふ。是徳なり。故に感通
響き、響きは形に影なるごとし。神明影也。鬼神著也
神明道は、日月光を以て、万事を感通し、理の明なる

主宰天地不測なること明らかなる時は、鬼神感ずべき道
理なり。新(アラタ)なる神明は造化の功用なれば、敬すべき道
理なり。人間に於ては其福祐を蒙り、時妖変なく、無病
なり。○神明と云は造化の功用を指て云ふ。造化とは天地
陰陽なる事を云ふ。功用は其変見る所を云ふ。宰主とは宰主
自然同様の意なり。変長なる時なり。○天地不測なること
如何なる時は神明洋々として其頃小さき如く、又は広き
事の如くなるべし。或は如くなるべしと云ふ。洋々とは流動
活潑見たるなり。水の流れなる意なり。○人分陰陽の
二氣陽を云魂と云ふ。陰を魄と云ふ。死時陰陽離散して
魂は地に帰し其子孫祖を敬して祭祀とし、
其魂鬼来り格して其祀をうくる理なり。○鬼神と陰
陽二氣屈伸往来するものを指て云ふ。神は陽の気氣
伸るなり。鬼は陰の気氣屈るなり。人死する時は其
氣を鬼と云ふ。○天は陽也。乾健なり。不信
父の道なり。地は陰なり。順なり。不信母の道
天地と云て乾坤と云は天地は形体なり。乾坤は二陰陽
なり。乾は健なり。是の沼なり。物質なり。故に坤は

順則ハ常行の理為相濟て人生る所の法なり是乃
天地ハ天地なる也人命ハ人なり人為相ハ人命なる法なり人
氣ハ天ハ東形ハ地ハ西なり蓋し混合して間なくして
中ハ位を為の道なり乾陽坤陰ハ陰陽の道天地ハ氣而間ハ
寒暖ハ人物ハ資て人體なる所ハ法なり故ハ天地ハ寒暖なる
體なりと乾ハ健坤ハ順是天地ハ性なり為氣沖和ハ
資て人性なる所ハ法なり故ハ天地ハ沖其性を云深く
之を考ふれハ則乾ハ父坤ハ母混沌ハ中庸なる所ハ
兄弟ハ人物天地ハ間ハ並生其資て人體なるの

皆天地ハ沖なり全體ハ偏高生ハ殊なり故ハ其性
於て明暗ハ柔ハ惟人也其形氣ハ四を資て是人心
也是ハ人性命ハ全體ハ通ることなり並生ハ中ハ於て
間須臾ハ離ることなるの故ハ間隔を云則其ハ是を
ハ色ハ兄弟の如く惟ハ是間隔ハ故ハ天下ハ一家ハ中國を
一人ハ間なく法なり物ハ則ち其形氣ハ偏を資て性命ハ
所ハ通ることなく故ハ義を類を同ハ所を云也
人の貴ハ為ハ其體性ハ為る所を以ハ是ハ為ハ是を
天地ハ なぜけて いまく為て ハ間也故ハ吾則其ハ是を視なり

示已、脩軍れしとき、ときに、元天地れ間に形ありて、動き若く、植情ありて性ありて、其性に沿ひ、其宜に
適ることなり、ここを、聖人、化育をなすに、道ありて、天地に
まじわるに、聖人、化育をなすに、道ありて、天地に
合ることなり、外に法る事に、ありて、聖人、其中に生まれ、則、元天下
乾を父、坤を母として、聖人、其中に生まれ、則、元天下
れ人、皆、天地れ子なり、聖人、天地に継承け、人物を
統べ、則、大君のこと

五行

木　元春　東に屬して青龍あり　青　將軍れ官孫為出なり
人、其氣を脩生ず、形貌長生仁、雷氣又工低小なり

火　亨夏　南に屬して朱雀あり　紅　君主れ官祥明出なり
人、其氣を脩生ず、西上、天下、間、至聰明、礼、文、楽れ、又画工なり
巳午、旬陣、騰蛇あり、其中央に屬して則、沖和れ徳、順、孫、の、倉庫れ官孫出なり

土　人、其氣を脩生ず、形貌敦厚、礼、至寛、量、寛博、又、文、楽、小なり

金　利秋　西に屬して白虎あり　白　相位の官治節出なり
人、其氣を脩生ず、西上、間、十殺、至尚義、又、重兵、權

水　貞冬　北に屬して玄武あり　亀　作法の官技巧出なり
人、其氣を脩生ず、眉、腰、門、分、て、至大、寛小、為、又、藝巧小なり

肝 肝は脈を所出風水
肝は竅を目に開くなり　目は肝に屬し目和黑白を分つ也
眉は肝に屬し木氣を稟つ也　春仁に屬

心 心は脈を所出君火
心は竅を舌に開くなり　舌は心に屬し苦
髮は心に屬し火氣を稟つ也　夏禮に

五臟脈

脾 脾は胃に脈を還元し所出
脾は竅を口に開くなり　口は脾に屬し口和則穀味を分つ也　中央信に

肺 肺は肺に脈を繫金に出る所
肺は竅を鼻に開くなり　鼻は肺に屬し鼻和則香臭を分つ也
毛は肺に屬し金氣を稟つ也　秋義に

腎 腎は膀胱に脈を出る所
腎は竅を耳に開くなり　耳は腎に屬し耳和則五音を分つ也
鬚は腎に屬し水氣を稟つ也　冬智に

書法式

一 筆法は書に上根に中根に末根に筆を
分て書字を筆に上に中に末に一字を
長に千字を書て一字となるなり

一 筆根は日真に三ごとく行いやくるごとく草いたるごとし
真は三体真を宗として行を以て
肉とし筆を以て皮とするなり

一 硯は硯に墨は墨を以て研ぎ墨を入て擂
磨し墨面は紙に伸に包ち磨し墨は紙に

蘭花を面白くするなり　兵庫すりの石臼の湯を注ぎ膠を溶て手で用ゆべし

一　墨は新硯に磨いたる墨を冬は湯に夏は水にて磨べし　常は温湯

一　紙うるして墨を付け白水を入墨を指て書べし　又

名紙金箔塗物などのとき書付墨付ぬれば解墨

筆を墨に入て書べし

一　石又は木物に書付て後の世までも消ぬ法あり　墨の

屎を墨にいれて書べしと　[illegible]

墨いぶりの物を乗うふるる物のとき木石を乗こそ世

世の習なり　墨の屎いぶるくるふるるの也　墨をするる

所茂のとふ和漢を兼ねれば己れ書るとも人様は

よろしきなり　又るるるれば自法は太刀ふれは用ゆと云流れあり

空海原かなを事あり　原かな書　行末迄月清和

書法あれば　流や木小書事　たやすきべし　後の世

筆道を殘し　[illegible]　人道とは　[illegible]　先生中子曰

古人書を流るる云いまだ兵大書を清べし　者ら今に

知らずして　流儀　[illegible]　筆を用ゆる法　何ら新

何ふる所の事を有体に法度一こふ其虚ふ虚して宿佛
ふて是を思ふることなくせよ新事既ふ少く事をとくべき
所にして其の時まく則基く似ん事を求ることあり且
且洞窟與て且今人且でなり且弥遊び意今を
所にして当を当人大ふ所を傷て如ふ閑を法を則を佛和の
法ふり字を法を事人の眼を徒ふことし一月ふ十月ふ知て
先眠廊をそなへ後形体を伺ふ宮文百殿一時ふ尽く具り
今自一日を徒ふ明日一日を伺ふふふ所若を思を思く
是を求ふ事ふ者ふ公文字陰所を思く事を祈れ

意をしくふ人ふまく悔ることのあるん

一 古人書ふ墨を用ふる事其墨ふん事を欲るに逝ざるの様
九けてすく居ふを所ふ後世ふ光を愛ん事を欲ふ其
者ん事を欲ふ其ふん事を欲を故ふ造作百端(アルイ)後念(ニ)
作ふ其ふ事ふ為て其ふを為ふるなり

一 墨高く陳れ隣の亂ふて字ふ光を放ふ新
隣ふ亂ふりて節繁帰ふる事ふ唯三百年の後
百会ふて用ふ所ふ

一 世ふ上ふて為ふ虚様ふ入ふるの実ふ虚様ふ為ふ所の事

言圓觀之此書拙こを藏の唐紙也今代人云唐紙とつくるい
懷素又い藤元素等の筆は紙にかきて相傳とて其法を
失ひ愛法を学ぶる実の唐紙い幸に昔より二王は筆跡
計一なるい其法は中古ふかしと云へ〳〵
一或人筆法論の初ふ公國は書を四王事言圓觀を
ふせるゆ意とそうとの事ふ初て云ふと云事あり又初て
初ると云事ふ公國初て五初初ゆえ筆法墨文風韓
筆跡遠て言意筆筆と唐紙とい三可く筆い初ゆ紙を
ゆえ〳〵書意は御ゆと云い むし筆にちゆえ唐紙ゆ

一 此國は筆法とゆるい王羲は孔後ちゆと聞ふ
伝る漢人の初〳〵を如義の甲斐伝〳〵ゆるゆりこれい漢
人云書を四王と云ふ筆は言葉遠〳〵
一 建は人名邦の三日人の書を觀て曰ふ二王は姫ゆて中
古の筆書ゆる云文又と及事ふ〳〵ゆ〳〵今周見是を學ふ
公國は書文い初人ふ最とゆこと
一 隋書五代乃間隋書云は隷書と云隷ふ秦隷漢隷對
あり漢隷い今の隋書これ也秦隷い程邈せ并子昂は
書ゆふ云王次仲てゆ〳〵て隋書を伝ふ文隋は姫ゆりと云ふ

世人中傳セシ王羲仲古法ヲ学テ隷作セシ
又遠ク後漢ニ到テ秦邕点画ヲ楷ニシテ永寧ノ八法ヲ
似テ隷ニシテ隷ノ書法ヲ附ニ定メシモノニシテ程邈ノ隷書
全ク形ノ隷ハ秦ニ始ル人モ漢ニ至テ秦邕ニ始ル故ニ漢隷
ヲ楷書ト号ハ篆法楷ニシテ秦漢ヲ伝フル隷ノ古今ノ
別ヲ示テ武法ヲ以テ邈ノ隷ノ真ヲ改ニ楷書ヲ以テ真ヲ以
ヲ書ヲ云ヘリ

一 墨妙篇曰谷ヲ似ルハ秦ノ王羲仲ヨリ古今法書苑云
小篆教シテ谷生ヲ谷形ヲ隷書出ヲ文谷ノ字体

[illegible]八分ニ云ハル人ハ八分ヲ云

一 行書ハ墨妙篇云行書ヲ似ルハ後漢ノ潁川劉注界
ナリ時ヲ書ニ依テ楷ヲ簡易ニ従テ草ヲ書流行ヲ
草ヲ行書ヲ云

一 章竹ハ書訣云漢ノ黄令史游ガ似ル所ヨリ草ヲ
文字ヲ書ハシテ不ヅ正ハ書ル文字ヲ
ヒヲ文字ヲ[illegible]ル中ノ此法ヲ用ヒ[illegible]ノ人ヲ
以合ル書ヲ

一 張字ヲ似ル法ハ書換ル時ハ[illegible]人ヲ史陽小[illegible]ヲ

落たる字をする事しは其文字はかりて書にすまひたる也
但其文字の遊はしくよく指て書りて接する事し
一 字を書損しつるを擬移時書損ひたる所は大根をつきて
おろしてそおろしは おろし大根にて字をけする事し
悪くおつる事あり其後よく明はんを引事し